

「亡き後の慰め」

創世記 24 : 6-7

November.7.2021

創世記 24 : 6-7 (パワポ)

Preface

信仰の父アブラハムの息子イサクは、母のサラが亡くなったことを悲しんでいました。

創世記 23 章を見ますと、サラが 127 歳で亡くなり、夫のアブラハムが悼み悲しみ、泣いたことが記されていますが、息子のイサクが母の死についてどう思い、どのようにしたのかということについては記されていません。

そこから聖書を読み進めて行き、先ほど読みました創世記 24 : 6-7 に至りますと、「イサクは、母の亡き後、慰めを得た」という言葉をもって、イサクが母サラが亡くなった後、どんな心境にあったのかを記しています。

つまり、母を失ったイサクは、慰めを失っていました。

慰めは、私たちにとって力です。

私たち人が世を生きていく上で、必ず必要な力です。

どんな小さな慰めでも、その慰めゆえに、ものごとを継続することが出来ます。慰めがあるからこそ、気持ちを新たにすることが出来ます。

慰めゆえに、私という存在の意義や意味を今一度覚えることが出来ます。

慰めは人を温める力であり、ほんの小さな一歩かもしれないけれども、大きな力を要するその小さな一歩を踏み出す原動力になります。

慰めは、私という人を肯定してくれる力であり、寄り添ってくれます。

たとえ間違ったことをしたとしても、たとえ正当な責めや咎めを受けたとしても、それでも私という人の人格をおおい、寄り添ってくれるのが慰めです。

だから、心に届く慰めを経験しますと、安心感を覚え、ホッとした気持ちになります。

「慰め」という言葉の反対語を調べてみますと、「悩み」「苦しみ」または、「責め」「咎め」という言葉が出てきますが、人は誰もが、世を生きていく上で慰めが必要な悩みや苦しみや責めや咎めに直面しますが、慰めはそれらの苦難を耐え抜く力を与えてくれます。

Part One

そんな慰めを、イサクは母の死をもって喪失してしまいました。

私たち人間は、楽しいことをしたり、美しい景色を見たり、好きな食べ物を食べたり、趣味に興じたりという行為行動からも一定の慰めを得ることは出来ませんが、

何分人間であるがゆえの人格が備わっているため、基本、人は、人を通して与えられる人格的な慰めにこそ、心からホッと出来るようになっています。

だから、イサクが母という愛する人を亡くして、慰めを喪失してしまったことは十分に理解できることですし、私たちにも起こり得ることです。

どんなに楽しいことをしても、どんなに美しい景色を見ても、どんなに好きな食べ物を食べても、どんなに趣味に興じることが出来たとしても、人格的な慰めを得ることが出来ないならば、それら楽しかったことが慰めにはならず、むしろ悲しみを増し加えてしまいかねません。

慰めを失うほどの大きな出来事が、私たちにとっての人の死でもあります。

ましてや、父アブラハムと母サラが年老いて生まれ、大平原で父と母との3人暮らしというイサクにとっての母サラの存在の大きさ、その慰めの度合いの大きさは、私たちが想像する以上だったかもしれません。

でも、そんな大きな慰めを喪失したイサクに新たな慰めとなる人が現れました。

妻のリベカです。

この創世記24：67でのイサクの年齢は40歳ですが、男40にして、今新たに慰めとなる人が与えられました。

創世記24章は、年を重ね、自らの死期が迫っていることを感じたアブラハムが、最も信頼を寄せていた家来に、イサクの妻を選び迎える旅に出るよう命じ、その命に従って出て行った家来が、イサクとの結婚に諸手を挙げて喜んだリベカと共に帰ってくるという何とも美しいと言いましょ、
「ああ、こんな男女の出会いがあるのか」と感嘆するような、羨ましいような話が記録されています。

そして、その記録の最後の言葉が、創世記24：67の

創世記24：67（パワポ）

という言葉です。

Part Two

年老いたアブラハムは、母サラを失って悲しんでいるイサクに、新たな慰めとなる人を与えたいと思ったようです。

もちろん、アブラハムの血筋から救い主イエス・キリストがお生まれになるという神の約束の成就を繋いでいく大きな歴史的側面があることは言うまでもない事実ですが、息子イサクに嫁を迎えてあげようとしたのは、イサクを慰めるための愛情でもありました。

この一連の婚活の記録を見ていきますと、神様は人を慰めたいと思っておられる方だということがよく分かります。

創世記 24 章の端々に、イサクの妻となるリベカを見つけ出す家来の旅が神の御心であり、神の導きであったということがとても分かりやすく記されています。 ちょっと見てみたいと思います。

創世記 24 : 42－52 (パウポ)

そして、これに対するリベカの反応です。

創世記 24 : 57－58 (パウポ)

こうしてイサクのところにやって来たりベカは、イサクの妻となり、イサクは母亡き後、大きな慰めを得ました。

神様は、私たち人が、かけがえのない人をなくすことをもって、慰めを失うということをよく知っておられます。

そして、その慰めを失った状態に人を置いておくことを良しとはされません。

創世記の始めに、最初の人アダムが一人であることを良しとはせず、エバをお与えになったことにも良く表れています。

天地万物をお造りになった唯一の神は、人を慰めたいと思っておられます。

イザヤ書に、神様がどれほどに人を慰めたいと思っておられるのかが、色々な箇所にも記されています。

イザヤ書 40 : 1 (パウポ)

イザヤ書 49 : 13 (パウポ)

イザヤ書 51 : 3 (パウポ)

イザヤ書 66 : 13 (パウポ)

これらの言葉を元に、新約聖書では使徒パウロがこのように言います。

コリント人への手紙第二 1 : 4 - 6 (パウロ)

主なる神様は、私たちがどのような苦しみの中でも慰めようとされ、慰めてくださいます。

そして、不思議なことに、そのすべての慰めを足りない者だらけの罪人である私たち人を用いて、人を通して慰めてくださいます。

第一コリントの 1 章で、「神は、宣教の言葉の愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです」とパウロが言いますが、神は、どんなに愚かであっても私たち人間を尊い大切な存在だと決め込んで、どこまでも私たち人を通して、神ご自身の慰めを与えることをお決めになり、実践されます。

神様は、神ご自身の慰めるという愛のわざを、「人を通してでないとやりません」と、恐れ多くも決め込んでしまいました。

もちろん、神様は、祈りを通して、聖書の言葉を通して、賛美を通して、礼拝を通して、直接私たちに慰めてくださいますが、結局のところ、そのすべての慰めるために用いるモノやコトは、必ずと言っていいほど、私たち人間が関わっています。

私たち人は、神の慰めを人々に、近くの人に、一番近い人に、伝え与える通り管であり、器なる存在でもあります。

そして、私たち人間は、神がお用いなさる人を通して慰めを得るようになっていきます。

Part Three

ただし、ここで私たちが注意し、肝に銘じなければならないのは、慰められたいという思いを満たすために人を利用するのは、慰めを得ることが出来ないということです。

もう一度創世記 24 : 67 を見てみましょう。

創世記 24 : 67 (パウロ)

「イサクは、母の亡き後、慰めを得た」という言葉の前に、大事な言葉があります。

それは、「イサクは、リベカを愛した」という言葉です。

イサクがリベカによって慰めを得る前に、イサクはリベカを愛しました。

得るよりも愛することが先です。

愛したら、得たのです。

慰めを得たから愛したのではありません。 愛したから、慰めを得たのです。

慰めを得たいとエゴに陥り、「私を慰めなさい」というのは、慰めではありません。

愛したら慰めを得たというのが、慰めです。

愛のない慰めはありません。

イサクは、自分にとって最も近い人を愛しました。

そうしたら、慰めを得ました。

死は、私たちから慰めを奪い取っていきますが、神様は続けて慰めとなる人たちを私たちの近くに置いてくださいます。

そして、その近くにいる人を愛することが、また新たな慰めへと繋がります。

神様は、徹底して、人を通して慰めを施される方です。

そして、近くの人を愛することをもって、慰めを施してくださいます。

なくなった慰めに、いつまでもしがみつくことをもって、人は慰めを得ることは出来ません。

もちろん、なくなったかけがえのない人との思い出や感触は、生涯忘れることの出来ない大切な記憶です。

しかし、神様は、私たちにもいつも新たな慰めを与えようとしてくださっています。

それは、人を愛すること、近くの人を愛することをもつての慰めです。

Part Four

私には、異母兄弟が4人います。

3人の兄と1人の姉の異母兄弟がいます。

去年の召天者記念礼拝の説教の中で、父が亡くなってさみしいという話をしましたが、父が亡くなって、私たち残された家族が漠然と心配していたのが、父という共通項を失った家族がバラバラになってしまうんじゃないかということでした。

厳しい父でありましたし、怖い父でもありましたが、土台は優しい人で、私たち6人兄弟にとって、また、母にとっても、父は確かに慰めでありました。

いつでもどんと構えて、どんなことがあっても、どんな悪いことが起こっても、どんな馬鹿げたことをしても、それでもいつも、私たち家族一人一人の味方にな

ってくれました。

もちろん、こっぴどく叱られ、叩かれ、「もうお前なんか、うちの子じゃない」なんていう言葉を発することもありましたが、なんだかんだ言って、いつも家族の味方でした。

そんな父が亡くなってみると、私たち家族一人一人にとって、父が慰めであったことを実感しました。

その慰めがないことに、大きな喪失感と寂しさを覚えることもありましたが、今でもあります。

父が亡くなってから、母と私と妹の3人と兄姉たち4人で、家族が分断してしまうのかなあと思うこともありましたが。

特に、母は、兄たちにとっては継母ですが、「この継母に兄たちはどうするのだろうか」と一抹の不安を正直覚えました。

しかし、そんな心配をよそに、兄たちは、父の生前の時よりも母のことを「自分たちの母だ」と本当に丁寧に、熱烈に慕い、愛を表し始めました。

母を大事に出来ていな私に向かって「おい、とよ！ お前おふくろのこと大事にしろよ！」と叱咤するほどに、母を大事にします。

今、母は、父が亡くなってから、40年暮らした東京での生活をたたみ、韓国の故郷に戻っているのですが、ドラ息子（私）は、母が住んでいる家にまだ一度しか行ったことがなく、行った時には母に生活費の足しになればと少しのお小遣いを渡すどころか、逆に母からお小遣いを頂いて帰ってきました。

でも、兄たちは、何度も韓国の母の家を訪ね、生活費の足しにとお小遣いも渡し、定期的を送金までしたりもしています。

このことが、どんなにか大きな慰めとなっていることか！

家族全員に、父亡き後、母を愛する兄たちの姿が、家族にとって大きな慰めとなっています。

Part Five

神様は、私たちにいつも慰めを与えたいと願っておられます。

そして、いつも慰めとなり得る人を、近くに置いてくださっています。

慰められたい気持ちを満たすために利用する人ではなく、愛したら慰めを得たという結果をもたらす愛する対象となる人を、いつも私たちの側に置いておいてくださいます。

今、神様が、私たち一人一人に置いてくださっている人を愛したい、愛しているという思い、行いが慰めへと繋がります。

人は人を愛す時、慰めを得ます。

愛とは、寛容であり、親切であり、自慢せず、耐え忍び、云々と聖書に書かれていますが、一言で言いますと、愛とはその人のために死ぬことです。

どんな屈辱でも、どんなとばっちりでも、どんな巻き添えでも、どんな痛みでも、愛とはその人のために死ぬことです。

その人を前にして、私が死ぬことです。

その人を前にして、その人を攻撃し、その人を見下げ、その人を許さなさい代わりに、私が死ぬことです。

なぜ神様が、ここまで堂々と愛を語り、慰めたいと仰るのかと言いますと、神ご自身であられるイエス様が、人のために、私たち一人一人のために死なれ、愛を体現され、そしてその愛の体現ゆえに、私たちに究極の慰めを施してくださったからです。

慰めの究極は、イエス・キリストにあり、イエス・キリストの慰めは人を通して私たち人にあらわされ、その慰めは人を愛することをもって体現され、実感します。

そして何よりも、私たちこそ、そんな神様の慰めをあらわす器です

Conclusion

イサクの経験した母亡き後の慰め、つまり、かけがえのない人をなくした後の慰めは、私たちの近くにいる人を愛した時に訪れます。

先に召された人のことを思う年に一度の召天者記念礼拝で、亡き後の慰めを得る愛の人でありたいと願います。

お祈りいたしましょう。

祝祷：イザヤ書 66：13a